

## 定信紀行

第十二話

『集古十種』の二七

寄稿 市文化財保護審議会委員

佐川 庄司

松平定信は、数多くの著書を遺している。定信侍臣の内親輔が調査した『守国公御著述目録』によれば『花月双紙』『退閑雑記』など138部を数えるという。さらにそれ以外にも多くの著書が確認されており、実に200部近い著書が遺されている。その内容も、執政に関することをはじめ、紀行・和歌・茶道・文化財（歴史）・随筆・作庭など実に多岐にわたっている。

中でも全国の文化財を模写などにより調査研究のうえ編纂された古文化財図録集『集古十種』85巻の刊行は「日本美術史のはじまり」とされ、日本国内にある古文化財を初めて総合的に全国規模で調査したものであった。

『集古十種』は、鐘銘・碑銘・兵器類（甲冑・旌旗・弓矢・刀剣・馬具）・銅器・樂器・扁額・文房・印章・墨蹟・絵画の10種の種別ごとに、北は津軽から南は四国・九州までを含む全国各地の杜寺や大名・個人が所蔵する古文化財1859点が掲載されており、

現在の文化財保護行政につながるものである。また、収載された文化財が現在ではその所在が確認できないものもあることから、貴重な文献となっている。

『集古十種』の編纂は、老中退任後の寛政年間（1789～1800）に定信の指揮のもと白河藩儒学者広瀬典などの学者、谷文晁をはじめとする絵師といった定信周辺の人たちの全国規模にわたる精力的な調査と、学者間の情報提供などにより結実した一大文化事業であった。

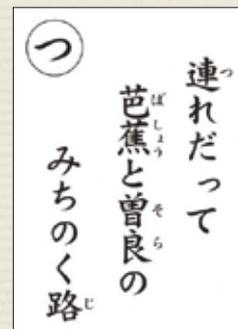
観光課 ☎(28)5526



▶『集古十種』（福島県立博物館蔵）

## 白河かるた 札でつながる今・昔

十二枚目「おくのほそ道」



俳人・松尾芭蕉は、歌枕

の地を巡り、古人の心に触れたいという思いから、奥州・北陸への行脚を志しました。1689年3月、門人の曾良を伴い江戸深川を後にした芭蕉は、約1か月の道のりを経て、ついにみちのくの玄関口である白河の関にたどり着きました。

古くから歌枕として知られる白河の関は、能因や西行ら先賢が歌に詠んだ、文人憧れの聖地です。芭蕉は「おくのほそ道」に「白河の関にかかりて旅心定まりぬ」と記しました。それまでの旅路の落ち着かない気持ちが一転し、この関を越えてから真の「みちのくの旅」が始まる——震えるような感動と覚悟をにじませ

ました。

旗宿に宿泊した翌日、源義経ゆかりの関山へ登り、満願寺を参詣しました。当時、山中には多くの寺院がありました。現在では焼失などにより、現在は芭蕉らが仰ぎ見た当時の姿を留めていません。

およそ150日に及ぶ壮大な旅路の中で、白河滞在はわずか2日間でした。しかし、芭蕉が「おくのほそ道」に刻んだ旅情は時を超え、今もこの地で語り継がれています。

悠久の轍が現在へとつながる、かつて先人が憧憬を抱いた白河の地に、私たちは生きているのです。

問まちづくり推進課 ☎(28)5533

お知らせ

ラウンジ

りぷらん

子育て情報

保健情報

くらしの情報館

定信紀行

白河かるた

休日当番医・無料相談ほか

市長の手控え帖